

りの地域からの汚染風の流入↓健康障害↓郊外に移
 転↓都市開発、という悪循環を汚染の抑止の面から
 早期に断ち切らないと将来に大きな悔いを残すこと
 になるのではないでしょうか。

今私たちは、おだやかな日に吹くそよ風の「にお

い」や風に含まれる「物質」に強い関心を持たなけ
 ればならないと思います。環境にとくに敏感で被害
 を受けやすいのは幼児たちの体なのですから。

(日本気象学会会員・写真家)

* 日本音楽著作権協会(出) 許諾第九〇一四五四七〇〇一号

季節の風

柴田 文子

二、三年前から書道を習っています。先日「風」という字を書きました。「風」という一字を色紙に仕上げたのですが、その字を眺めているうちに、なぜ風という字の中に、虫という字があるのだろうか

と、妙に気になってきました。大字典を引いてみますと、こんなことがわかりました。気候の異なるのに従って風が異なる。そして風の異なるのに従って、その折々に虫類が孵化する。だから虫という字

を失い、ただかすかに赤く空にかかっているだけになってしまいます。人間たちはただ窓という窓、扉という扉を閉めきり、ひたすら耐えるのみとなります。サウナ風呂の中で我慢くらべをしているような感じでした。四年近くおりましたが、アルジェでは風といえばシロッコ、それ以外の思い出がありません。気候の変化が比較的大まかな風土では、季節の風に微妙な変化をよみとる必要性もなく、従って風にいろいろな呼び名をつけるようなこともなかったようでした。滞在中、一般的にいう「風」と「シロッコ」という言葉以外に、風を表す言葉を聞きませんでした。もっともあまり上手でないフランス語と、挨拶程度のアラビア語しか通信手段をもっていない私でしたから、確かなことは申せないので

が。パリや、地上最後の楽園などとよばれるマダガスカル島にも、しばらく暮らしていましたが、ともかく「更衣ころもがえ」などという行事が今でもしっかり日

常生活に根づいている、四季をはっきりもつ日本のような国の方が、珍しいのではないのでしょうか。

風は人の心に様々な思いをひきおこします。さわやかな風に口笛でも吹きたくなるような楽しさを感じたり、秋の風にふともの寂しさを覚えたり……。昔から詩人たちは風に魂を揺り動かされ、たくさんの美しい歌を生んできました。現代短歌から、私の好きでたまらない歌を二首、ご紹介したいと思います。

子を産みて瘦せし野良猫白南風の

くさむらに来てしづかにすわる 石川不二子

梅雨明けの明るい日、温かな南風が吹いていま

す。子を産んだ母猫がやってきて、静かに草むらに座りました。やせて産後のやつれはみられるものの、その様子には、なんとなく満ちたりたものが感

じられます。人間と猫という違いはあっても、同じ産む性への共感というのか、やはり幾人かの子どもの母親である作者の、あたたかな目を感じられると思います。もう一首

秋草に埋もれ転がるあそびして果てに

聞きしか野をゆく風を

武川忠一

作者の少年期の回想の歌です。野原で転げまわって遊んでいるうち、ふと気がつくともう日も暮れかけている。そして草原をわたる寂しい風の音を聞いたというのです。美しい歌ですね。ファミコンなど室内での遊びの多くなったこの頃の子ども達は、大人になったとき、自分たちの子ども時代をどんなふうに思いおこすのでしょうか。この歌のような世界に、全く共感を持ちえない世代が育っているのではないかと、とても寂しい思いがします。

気候の変化に富む日本の風土、そこにはぐくまれてきた細やかな言葉の数々、そして歌に記された人間の心の世界、そんなあれこれ思うとき、私には日本人であることが、なにかとても嬉しいことに思われるのです。

(我孫子市せせらぎ短歌会)

